
職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

【Nコード】

N5379Z

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

俺の名前は早瀬正樹。

家族は高二的の妹、中三の弟、そして母さん。父さんは一年前に死んだ。

職業はヒーロー。月給四十万の高給取り。表向きは公務員。実際、俺の雇い主は政府の役人達だ。

俺の仕事、つまりヒーローの業務内容は街に出没する怪物、通称ビーストを倒すこと。強化スーツを着て、人知れず下水道の中で日々闘っている。

二人の先輩は俺を気遣ってくれる、いい人達だ。技師連中は一癖あるが、親身になってくれる。若干嫌味な科学者達も、根は悪いやつじゃない。

家からは近いし、職場環境も悪くない。

でも、俺は今の仕事が大嫌いだ。

俺がやりたいことはこんなことじゃない。本当は辞めてしまいたいけど、俺には金がある。

元々病弱だった母さんは入院している。妹や弟はまだ学生だし、金を稼ぐには若すぎる。

俺が、金を稼ぐしかないんだ。

俺のような二十歳になったばかりのやつが、この仕事以外で大金を手に入れる方法はない。このバカらしい仕事を辞めるわけにはいかなかった。

やり甲斐もない仕事を、金のために続けてる。それ以外、なんにもできずに。

一体俺は何のために生まれたんだろう。

金を稼ぐただけにか？

そんなの、つまらなすぎるじゃないか。

若干暗めの小説です。

業務内容、戦闘。

何のために生まれて、何をして生きるのか。
答えられないなんて、そんなのは嫌だ。

昔、小さい頃にテレビで聞いたフレーズが頭の中で響いている。
俺は何のために、何をして生きているんだろう。
今、何をしているのか。その答えは簡単に出てくる。
それは手段だったはずだ。けれど、何時の間にかそれは手段から
目的に刷り変わり、俺をがんじがらめにしている。
そのためだけに、俺は今生きている。
俺はそんな俺が嫌で嫌でたまらない。

あたりは暗い。そして狭い。横幅五メートルくらいのそこに、俺
はいた。

俺の目の前には敵がいる。一言であらわすなら、化け物だ。
成人男性と同じくらいの背丈をしているそいつは、蠼螂のような
外見をしていた。全身は黄緑色。頭部は蠼螂のそれで、両腕には巨
大な鎌が一つずつ。そのまま蠼螂を巨大にして二足歩行させている
感じだ。太股の太さは人間の倍以上。膝の関節は人間のとは違い、
逆関節。よくもまあ、それでバランスをとっているよな、と感心す
る。

そんな事を考えている俺だって、中々に奇妙な格好をしている。
俺を一言で表すなら、変身ヒーロー。幼い頃によく見ていた、等

身大の特撮ヒーローのようだ。

俺はスーツを装着している。世間には公にされていない、出回れば世間の常識が覆るほどの、高度なクノロジーの結晶だ。

全身を覆うそれは赤をベースとしている。頭のヘルメットにはサーモグラフィーやら赤外線スコープの機能が取り付けられている。光の全くない場所でも戦えるように、だ。

ここは、地下の下水道。地上から水が滴り落ちてくる。外は小雨なんだろうか。

俺は膝の上まで汚染水にどっぷりつかっている。洗剤や雨水だけなんかじゃなくて、排泄物なんかも混じっている。一年前までは嫌で仕方がなかった。少しは慣れたが、まだ嫌悪感がある。

蠃螂が跳躍すると同時に、汚水が飛び散る。俺のスーツに数滴降りかかった。

天井スレスレを滑空する奴を追う。水の抵抗を無理矢理振り切る。地面を蹴り、蠃螂に飛びついた。

黄緑の身体を掴む。重さに耐え切れず、蠃螂は落下していった。水飛沫を上げて、俺たちは汚水に突っ込む。

水中で蠃螂が暴れた。二つの鎌がスーツを切り刻もうと襲い掛かってくる。俺は咄嗟に左右のそれを掴んだ。蠃螂は力づくで押し切るうと、全体重を乗せてきた。水中だから大した重さにはならない。蠃螂の腹を蹴り上げる。奇妙なうめき声が聞こえ、直後天井に蠃螂の身体が激突した。

起き上がると同時、蠃螂が俺に向かって突進してくる。襲い掛かる鎌を回避し、バックステップ。鎌が下水に叩きつけられた。水飛沫で視界が遮られる。

視界をサーモグラフィーに切り替える。水飛沫を跳ね除け、蠃螂が突進してくるのが見えた。上から振り下ろされる鎌を紙一重で回避する。

大振りな動作には隙が伴う。鎌を振り下ろしたことによって、蠃螂は体制を若干崩していた。

間合いに力強く踏み込んだ。

蠍の顔面に思いつき右拳を叩き込む。拳を振り切り、吹っ飛ばす。蠍の身体は十五メートル吹っ飛んだ後、コンクリートの壁に激突し、めり込んだ。

チャンスだ。

足に意識を集中させた。頭部のヘルメットは俺の思考を的確に読み取り、スーツに指令を下す。右脚部にエネルギーがたまっていく。一気に十メートル以上を跳躍し、とび蹴りを蠍の腹に叩き込んだ。やりすぎるほどに。

渾身の蹴りは、蠍の腹部を貫通してコンクリートの壁にめり込んでいた。

——あ、やっべ……。

ほんの一瞬、暗い下水が光に包まれる。

足の裏に籠められた全てのエネルギーが、コンクリートの壁にぶちまけられる。

発光を伴った爆発がコンクリートを破壊した。まぶしい光が下水の中に差し込む。

蠍の身体は四散し、あたりに散らばっている。敵は倒した。それはいい。いいんだけどよ。

貫通した穴は川原にそのまま繋がっていた。下水の水が漏れ出し、ていく。

——また、やっちゃった。

今月一回目のヘマだ。まだ今月は二十日間もあるのに。

「給料、減っちゃうかもしれないなあ……」

俺は深くため息をついた。

業務内容、戦闘。（後書き）

引用、アンパンマンマーチ。

上司二名。立地条件良。ただし不満多々あり。

俺は早瀬正樹、二十歳男性。職業ヒーロー。表向きは公務員。月給手取り四十万。成績及び普段の仕事へ向かう姿勢によって給料の上下あり。

家族は、高校二年生の妹の美希、そして高校受験を控えた中学三年の弟の善樹、そして病院で寝たきりになった母さんがいる。父さんは一年前に死んだ。

家の働き手は俺一人。一人で家族の入院費やら授業用やら何から何まで稼がなくちゃいけない。

父さんの残してくれた金だけでも数年は働かないで暮らしていけたけれど、でも、金つてのは油断すればすぐに底をつく。

だから俺は働いている。

気乗りのしないこの仕事を続けている。

この街の駅には、二本の路線が通っている。朝と夜はサラリーマンでこった返しになる。駅前には七階建ての電気屋があり、競うように大型の本屋やファミレス、パン屋やファーストフード店がひしめいている。ラーメン屋は四軒、牛丼屋は有名どころが殆ど営業している。その少しの合間を縫うようにしてビルが聳えている。昼間はそこで、せつせとサラリーマン達が働いている。

駅から少し離れると、そこにはマンションがいくつも建てられている。当然のように二件の大型スーパーが存在し、互いに客を取り合っている。

義務付けられた毎日のトレーニングが終わり、俺は先輩である源

さんや乃木さんと共に家路についていた。

源さんは三十代にしては屈強すぎる体付きをしている。二の腕は常人の倍はある。胸襟が盛り上がり、今は違うが、シャツを着てればピチピチに突っ張るだろう。

乃木さんは物静かな男の人で、俺の六つ上。後輩の俺の面倒をよく見てくれている。顔はなかなか整っていて、未だにこの人に彼女がいないのが信じられない。

駅から離れたこの場所には、一戸建てや安アパート、銭湯に商店街などの、駅前とはまた違った風景がある。賑やかな駅前とは違い、ゆっくりと落ち着いている感じがする。近くには高校があり、その隣にはエスカレーター式に進学のできる大学もある。どちらかと言えば、俺はこっちの、このゆったりとした感じが好きだ。駅前はごちゃごちゃしていて、あまり好きじゃない。

長距離やらスクワットやら腹筋やら背筋までさせられたせいで、身体が重い。歩くだけで辛い。もうかれこれ一年は繰り返している事なんだけど、未だに慣れない。

今日は下半身と体感。明日は上半身強化メニュー。明後日になれば、ようやく流して楽なメニューになる。今日は源さんが休養日だった。明日は乃木さんが休養日。上半身、下半身、休養日ってメニューを三人でローテーションしている。

俺たちの表向きの職業は市役所に勤める公務員。実際は、街に現れる化け物達を人知れず倒しているヒーローだ。給料の話をすると、源さんはたしか、百五十万くらい貰ってたと思う。乃木さんは百万。二人とも俺よりかはるかに高い給料を貰っているのは、ちゃんと結果を出してきているからだ。

まだこの仕事に就いてから一年くらいしか経ってないから、手際が悪く、月に倒す化け物の数も少ない。それでも、手取り月四十万つてのは、二十歳って言う俺の年齢を考えれば、十分すぎるくらいだ。でも、俺にはまだ金がいる。

「今日も一日、がんばりましたっ」と

源さん——フルネームは二階堂源さん——が、呟く。

「頑張ったって、今日は源さん、営業に出てないじゃないですか。しかも、トレーニングも流しだったし」

俺達は化け物を倒すために外に出る事を「営業」と呼んでいる。一般人に話を盗み聞きされても問題がないように。

ちなみに、「営業」命令が出た時、優先的に出向くのは前日に軽いトレーニングをした者、となっている。今日は、昨日軽めに流した俺が「営業」に出る。明日は、今日流した源さんが。明後日は乃木さんが、と言った具合だ。

「俺は今年で三十八。普通だったらメタボってる歳だったの。若いお前らとは違うんだよ」

などと源さんは抜かしているが、二十歳の俺よりも体力は上だし、筋力だってかなりある。腕なんて、平均的な成人男性のそれよりも二倍くらいは太い。太股は筋肉が隆起して逆に気持ちが悪いくらいに見える。

「俺よりも乃木の方が動けるしな。もう駄目なんだ。最近は身体が重くてよ」

乃木さんはそれに対し頭を振って答えた。謙遜しているんだ。そんな事ないですよ、とか、そんな感じに。多分、その通りだ。

一年間付き合ってきて、ようやく殆ど喋らない乃木さんの思考を読み取れるようになった。

乃木さん——本名、乃木功治さん——は源さんほど筋肉があるわけじゃないけれど（というか源さんが異常なんだけど）、引き締まったいい身体をしている。腹筋力を入れなくてもはつきりとわかるくらいに割れている。源さんとは体重の重さの分の差もあるだろうけど、三人の中で体力が一番あるのは乃木さんだ。足が一番速いのもそう。かつて、強豪高校のサッカー部でレギュラーとして全国大会に出た事があるらしい。身体を使うセンスが高い。源さん曰く、「ポテンシャルの塊」だそうだ。

「っーかよ、正輝テメー、またやったらしいな。何回目だよ」

「え、何のことっすか。いやだなー。おかしい事いわないでくださいよ」

「ごまかしても無駄だって。お前はいつになっただら下水を破壊しないで闘えるようになるんだよ」

「いや、まあ。あははは……」

「……早瀬、お前はもう少し落ち着いて闘った方がいい……」

俺たちに聞こえるか聞こえないか、それくらいの声で乃木さんが呟いた。

「何なのお前？ 器物破損楽しんでんの？ 俺らの仕事を公になんて絶対にしねーから、法律違反にはならねーけどよ。減給はされっけど」
「そんなわけないじゃないっすか。給料下がるのなんて、最悪ですよ。今、余裕ないですし。今月はまだ一回目なんで、大丈夫でしたけど……」

三人の中で一番ひよろつちいのは俺だ。筋力面では源さんに絶望的なまでの敗北を喫している。脚力や体力でも乃木さんに圧倒的に劣っている。反射神経がいいわけでもない。何か別の特出したもの、例えば状況判断が言い訳でもない。身体を鍛えている分、その辺のサークル生活をしている大学生よりは筋力もあるし動けるが、それだけだ。

だから化け物の撃退数も伸びないし、だから給料も増えない。

「……焦っているか……？」

乃木さんの言うとおりだ。俺が一番劣っているのがわかっていて、だから、焦る。焦りがあるから、ミスをしでかして撃対数が伸びない。給料も増えない。そして、また焦る。悪循環だ。そうわかってても、焦らずにはいられない。俺には金があるんだ。一刻も早く、給料を上げなきゃいけないんだ。

「最近はいいつらの数も減ってきたよなあ」

源さんがぼやいた。あいつら、というのは俺たちの敵である、あの怪物達の事だ。

「そっすね。前は三日に一回くらいは出てましたけど。二週間ぶり

ですもんね」

「あいつらいないと暇なんだよな。トレーニングばつかだと飽きるっつーか」

不謹慎だなあ、とか思いつつ、俺は相槌を打つ。あの化け物たちに、殺された人間もいるんだ。まあ、冗談だつてことはわかるんだけどさ。

「でも、平和に越した事はないっすよ」

「いや、まー、確かにそれはそうだな」

あの怪物たちが一体なんなのか。科学者たちによると、あいつらは突然変異の産物らしい。詳細な説明をされたことはなかった。興味もなかった。倒すべき相手。俺には、それだけで十分だ。

「数、減ってきてるって事なんっすかね」

ここ二ヶ月の傾向をみていると、そうなのかもしれない。

「さあ？その辺は俺にはわからん。こりゃー、俺たちがお役ごめんになる日も近いかな？」

「……笑えないっすよ」

仕事がなくなるって事は、要するにクビだ。表向きは公務員という事になっているが、政府から特殊な形でやとわれているわけだから、解雇されて記憶を消されるという可能性がないわけじゃない。回異物たちを目撃した一般人にも記憶を消したり違う記憶を植えつけたり、そんな事をしている奴らだ。ありえなくはない。

「冗談だつて。上手く隠れてるか、安定期が重なってるだけなんだろう。そのうち、すぐに忙しくなるさ」

そうじゃないと困る。もしもこの仕事をリストラされたら、俺は生きていく術がない。

源さんはどうなんだろう。結婚はしているし、ちゃんとその辺の事は考えて、貯金とかしてくれているのかもしれない。父さんもそうだった。

商店街の中に俺達は入っていく。商店街はアーケードになっている。塗装のはげかかった看板や、地面の罅割れたタイル。お世辞に

も綺麗とは言えない。

その分、活気に溢れている。八百屋のおっさんは元気に声を張り上げてるし、魚屋ではマグロの解体ショーなんてのをやっている。店の前に小学生が何人も群がっていた。

他愛のない会話をしながら俺達は商店街の中を歩く。

「ありがとうございまーす」

花屋の店員が明るい声で客のおばさんに微笑んでいた。おばあさんの手には花が添えられている。

俺も、たまにいく花屋だ。この辺で花を買えるところといたら、商店街の中か、マンションの立ち並ぶ住宅街近くにある大型ショッピングモールの中にしかない。別にどちらで買ってもそんな違いはないと思う。

「ま、そんな心配することちゃねーわな。最悪、コネを使って市役所に天下りすりゃいいんだしな」

源さんの明るく無責任な発言に、若干救われる。いや、そもそも俺を不安な気持ちにさせたのは源さんか。感謝するのは色々と間違ってるな。それに、この歳で天下りつてのもどうかと思う。

「そんじゃ、俺は今日当番なんでこの辺で。後は二人でよろしくやってくれ」

俺と乃木さんが頭を下げた。一応、先輩なんだ。最低限の礼儀は守る。心の中でちよつとくらい悪態をつくのは、しょうがない。

源さんは狭い店と店との間に入っていた。少し窮屈そうだ。その先には入り組んだ道があり、行き止まりとなっている。何も知らなければ絶対に気がつかない場所にスキヤナーがあり、そこに専用のIDカードを差し込めば壁がずれ、裏道へ繋がるようになってる。

俺達の雇い主は政府だ。街の改造なんて、当たり前のようにやっている。

例えば、商店街の中にもある、マンホール。この街にあるそのいくつかは、俺が闘っていた化け物——ビーストを捕獲し、下水に

引き込む装置となっている。蓋が電話ボックスほどの高さにまでせり上がり、誘導式のワイヤーが目標を捉える。強化ガラスの中にピストを引き込み、そのまま下水に送りつける仕組みになっている。地下には俺や源さんが下水に直行できるようにと、通路が用意されている。源さんが向かったのもそこだ。

「……どうする。飯でも、食いに行くか……？」

俺達はよく一緒に飯を食いに行く。せいぜい牛丼屋やラーメン屋程度だが。い。

乃木さんはいい人だし、源さんもなんだかって優しい。いい先輩だ。一緒に飯を食うのは楽しい。

「すいません、今日は止めときます」

けど、今日はそんな気にはなれなかった。

「……そうか……」

乃木さんの口調には少し寂しそうな感情が籠っていた。意外と寂しがりやなんだ。この人は。

「すみません。今日はちよっと、寝たい気分なんで」

嘘をついた。本当は寝たくなてない。ただ、独りになりたかっただけ。

商店街を抜けた。ここから先、俺と乃木さんの帰り道は違う方向になる。

「じゃあ、俺はこの辺で」

頭を下げ、乃木さんと別れた。乃木さんも軽く会釈をしてくれた。俺は一人で街を歩く。

今は四月。入学して間もない学生と一つ学年を上げた学生が、世間には溢れかえっている。新鮮な気分を毎日過ごしてるんだろう。俺だって本当だったら、大学三年生になっているはずだった。

今すれ違った三人は、多分この近くにある私立大学のの大学だ。賭け麻雀の話をしていた。三万も負けた、と言っていた。

懐かしい。俺も大学に入りたての頃よくやっていた。あれほど大学生に向いている遊びはない。娯楽の極地だ。今でも源さんや乃木

さん、あとはスーツのメンテと改良をやってくれる数人の技師たちと麻雀をやるが、しかし大学生の頃にやっていたあの雰囲気はもう味わえない。

こんなはずじゃなかった。どうしてこうなっちまったんだろう。

後悔なんて及ばない所に原因があったっていうのに、俺は心の中で悪態をついた。

ちくしょう、ふざけんなよ。何で俺は、こんな毎日を送らなくちゃいけない？

我が侂だつて事はわかっている。皆、生きる為に毎日働いているんだ。俺はたまたま、それが人よりハードで人より暇がないという、それだけのこと。

わかっているが、俺はこの仕事が嫌で仕方がない。

回想、至急新人求む。

あの時の事を思い出す。父さんの葬式の、あの日のことだ。

「お悔やみ申し上げます」

喪服を着た男が、俺達に深々と頭を下げた。母さんは丁寧にお辞儀を返す。俺もそれにならった。妹の美希と弟の善樹も続く。それが何度目の行為かは、もう数えていない。

父さんが死んだのは突然だった。何の前触れもなく、ある日いきなり逝ってしまった。

俺がそれを聞いたのは昼間の大学だった。学食でカツカレーうどん定食を食っている時のことだった。俺は校内放送で事務に呼び出された。特に心あたりもなかった俺は、一気に定食を駆け込んで、それから事務へと向かった。どうせ大した用事じゃないだろう、と思っていた。そしたらだ。事務で受け取った受話器からは、機械的で感情なんて籠っていないような声が「あなたのお父さんが亡くなりました」と告げてきたんだ。

突然すぎて、訳がわからなかった。

死因は過労死。電話越しに、そう言っていた。

父さんは市役所で働く、公務員だった。土曜日も日曜日も仕事に出ていた。かと言って仕事にしか興味がないというわけでもなく、俺がまだ小さかった頃、休みを取ってテーマパークに連れて行ってくれたりもした。俺や母さん、美希や善樹の誕生日は絶対に祝ってくれた。いい、父さんだった。

その父さんが、死んだ。

葬式はあっさりと終わった。

半ば放心状態だったから、具体的に何をしてたかなんてロクに覚えていない。

葬式が終わって、火葬も済んで、俺は親類の叔父さんに言われるがまま、料亭の手配をしていた。どうして葬式が終わったあとに、料亭なんか行かなくちゃいけないのか、俺にはわからない。

そという慣わしなんだという事はわかるが、どうして皆、そんな気になれるんだろうか？

母さんは無理して笑顔を作ってる。けど俺は、明るい顔なんてできそうになかった。

「早瀬正輝君かい？」

予約していた料亭への連絡を終えた俺に、その人は尋ねてきた。

「あなたは？」

「俺は二階堂源。君のお父さんには、よくしてもらっていた。君にだけ、話しておきたいことがある」

場所を変えようか、と男、つまり源さんは駐車場に向かっていく。俺は不信感を抱きつつも、ついていった。

「君のお父さんのやっていたことについてだ」

源さんはあたりに人がいないことを確認すると、俺に向かって語りだした。

父さんの本当の仕事について。

「なんなんですか、それ」

訳がわからなかった。

だってしんじられるか？ 俺の父さんが、普通の父親だった父さんが、謎の怪物達と闘っていたなんて。

この街には怪物が現れる。

そういえば、そんな都市伝説を聞いてことがあった。でもそんなの嘘だとかおもえなかったし、信じてもしいなかった。

でも、目の前の男はそれが真実だという。

「君のお父さんは、人知れず町の平和を守っていたんだよ」

父さんが怪物退治の仕事を始めたのは、二十四年前だという。

その数年前から日本各地で現れるようになった怪物たち。政府はなんとか情報操作をして存在をもみ消していたらしい。

「そして次第に、情報操作だけでは抑えきれないほどにまで被害は拡大してしまっただ」

だからその対策として、政府は対策本保を立ち上げた。一般人に知られず、化け物達を倒せるように。

都市部なら必ずある地下空間——下水に化け物たちを誘導し、強化スーツを着てそれを殲滅する。

父さんはその装着者として選ばれた。スーツには適正があるらしい。スーツのシステムが神経と接続する際に、適性がなければ人格が壊れてしまうらしい。父さんにはその条件をクリアしていたというわけだ。

父さんはその提案を呑んだ。そして、化け物たちを倒すヒーローになったというわけだ。

馬鹿馬鹿しい。冗談にもほどがある。

「そして、三日前。君のお父さんは、化け物たちに殺された」

「ふざけてるんですか？」

「信じられないだろうが、本当の事だ」

その日あったばかりの、体格のいい厳つい男はそう言った。

「俺の責任だ。俺がもっとうまくやれていたら、きっと光輝さんは死ななかった」

なんだよそれ。わけわかんねんだよ。そんなんで、父さんは死んだってのかよ。

今まで何も知らなかった。いや、知るわけなかったんだ。父さん

はずつと隠してきたんだ。でも、なんでなんだよ。

「光輝さんはいい人だった。正義感が強く、いつもみんなのために戦っていた。あの日も、襲われている民間人を助けようとして、それで……」

正義感が強くて？ みんなのために？ そんなんで死んだってのかよ。

「これが真実だ」

全てを否定したかった。だが、それが本当の事なのだという。たちの悪い冗談だとは思えない。

「一緒に俺たちと闘ってくれないか。光輝さんの後を継いでくれ」男は一枚の紙切れを差し出してきた。

「これは俺の携帯の電話番号だ。気が向いたらでいい」そういつて、源さんは俺の前から去っていった。

——捨ててやろうか、こんなの。

父さんが何で死んだのか。そんなのはどうでもいい。俺は気に入らなかった。俺の知らない所で、思いもしな様な事が動いて、そのせいで父さんが死んだ。

気に入らない。

ぐちゃぐちゃにしてやりたかった。全部否定してやりたかった。

けど、できなかった。

俺にはそれが必要だったから。

数日後、俺は源さんに電話をかけた。

父さんの遺志を継ぎたいとか、俺が街を守ってやるって言う、立

派な決意や正義感なんてのが理由じゃない。

ただ一つだけ。金の為に、だ。

俺の家は、父さんの収入で成り立っていた。母さんも昔は働いていたらしいが、元々病弱だったせいかな、数年前から入退院を繰り返している。とてもじゃないが、働けない。高校生の妹や中学生の弟はなおさら、働けるわけがない。

大学生の俺は、バイトをして多少は家に貢献することができる。でも、そんな端金で生きていけない。俺と妹たち、合計で三人分の学費を払わなくちゃいけない。母さんの病院代も払わなくちゃいけない。ガスも水道代も電気代もはらわなくちゃいけない。

俺には金が必要だった。それ以外に理由なんてない。

金のために、金のために、金のために……。

毎日義務付けられたトレーニングを行い、ビーストと呼ばれる怪物たちを倒す為に下水で闘う。休日なんてない。常に呼び出しに応じれるようにしなければいけない。泊まりの遠出をするには、年二回のみ許されている有給を使うしかない。

大学を中退した直後には友人からも遊びの連絡があった。だが、その殆どを断らなければならなかった。結果、連絡は途絶えていった。

俺はどんどん一人になっていく。

源さんや乃木さんとどんなに仲良くなっても、むしろそうなければなるほど、周囲の人が離れていく。家族ともなにかが少しずれていく。

金は手にはいる。月四十万もの大金だ。けど、代わりに大切な何かが欠けてゆく。

帰宅、ぼろ酔いしつつ自問自答。

夜。

「んー……」

寝れなくて、ベランダで酒をあおっていた。

なんというか、俺も大人になったんだなあって思う。オッサンみたいだ。まだ二十歳なのに。

「起きてたんだ」

声がした。妹の美希だ。帰って着たばかりなのだろう。美希の通う、名門私立の制服を着ていた。

「まあな」

俺は視線だけ向け、返事を返す。

「善樹は？」

「塾だよ。あと少ししたら帰ってくると思う」

高校受験を控えた善樹は、毎日夜遅くまで塾に通っている。奨学金を取りたいと言っていた。そこまで頑張らなくてもなんとかしてやれる。助かる事には間違いないんだけど。

「仕事、どうなの」

ぶっきらぼうな口調だ。けど、美希なりに心配してくれていると言っ事はわかっている。

美希は、というか俺以外は皆、父さんが過労で倒れたんだと思っている。実際、そう説明されたはずだ。父さんのことがあってせいで、美希は——俺の家族はみんな、ちょっと神経質になっている。俺に対してだけじゃない。全員が全員に対して同じ事を思っている。自分は頑張るくせに、他人の頑張りを恐れている。その結果死んでしまうことが怖いんだ。だから、余計に自分が頑張る。

俺だって、そうなのかもしれない。

「まあ、ぼちぼちだな」

「ごまかさないでくんない？」

冷蔵庫を開けながら美希が呟くように言う。

「大丈夫だ。まだ若いんだから。心配すんなよ」

「でもさ」

「いいから任せとけって。俺は兄貴なんだぜ。アテにしてろ」

酒を一気に飲み干した。そうしたい気分だった。

俺がやるしかないんだ。

父さんは死んだ。母さんは病院だ。妹の美希も弟の善樹も、金を稼ぐには若すぎる。俺だって若いが、だけど俺には大金を手に入れるだけの手段がある。

だから闘ってる。気乗りもしないのに身体を鍛えて、やりたくもないのに下水に両足つつこんで、それでもしなきゃ、金は稼げない。……少しは気をつけてよね。父さんみたいになったら、みんな悲しむから」

俺のすぐ後ろの美希が立っていた。片手には空のコップが握られている。

「ああ、大丈夫だ。問題ねえよ。だからさ、お前はさっさと寝ちまえよ。肌が悪いんだろ。夜更かしするとさ」

「まだ十一時だけど」

「どうせ今日も長電話でもするんだろうが。さっさと寝るつもりでいるっての」

美希が真夜中に一時間以上の通話をするというのは当たり前のことだ。別にそれに関してとがめるつもりはない。高校生なんてそんなものだ。

「わかったわよ。アンタも、さっさと寝なさいよ」

そう吐き捨て、美希は台所に向かっていく。浄水器のコップに注いでいるのだろう。うちにはあまりジュース類のものはない。飲み物と言えば、牛乳と酒くらいだ。

美希はもう何も言わなかった。俺も何も言わなかった。

酒をもう一度煽ろうとして、中身が空だということに気がついた。

夜風が身に染みた。もう四月だというのに。

「そうだよ、やんなきゃならねえんだよ……」

俺は空のスチール缶をきつく握り締めた。

母さんの入院費はもちろんのこと、美希や善樹の学費も馬鹿にならない。今年、善樹は高校受験を迎える。塾にいかせてやるのにも、金がかかる。来年は美希が大学受験だ。受験料が足りなくて、滑り止めを受ける事すらできないなんて、そんな状況にしてやりたくない。

だから俺は闘う。それ以外の理由なんてない。やりがいなんて感じない。

元々、運動なんて好きじゃないし、格闘なんてもつと好きじゃない。むしろ嫌いだ。それでもそうしないわけにはいかない。

なあ、父さん。どうして父さんはこんな仕事をやってたんだ？

毎日毎日、バケモノ、バケモノ、バケモノ、バケモノ。街を守ったって、誰かに賞賛されるわけじゃない。給料が良いだけだ。

そんなのは嫌だ。このまま終わりたいくない。

金を稼ぐ為だけに働いて。金を稼ぐ為に生きたとして。その結果何が残るのだろう。

なあ、父さん。教えてくれよ。どうして父さんは、こんな仕事を続けてたんだ？

源さんは昔、父さんはみんなのために闘っていたと言った。見ず知らずの誰かを守る為に、こんなことをずっと続けて立ってたってのか。それが、父さんのやりたかったことなのか？

俺は違う。

俺にだって人並みに夢はあった。建築の仕事につきたかった。こんな仕事、本当はやりたくなかった。でもこうしなければ生きていけない。このヒーロー紛いのことをつづけなくちゃならない。

父さんの生き方を否定する気じゃない。でも、これは俺がやりたいことじゃないんだ。

そうして、言い訳のように、この境遇を呪っている。

どうしてこうなったのか。

どうしてこんな事をつづけなくちゃいけなかったのか。

どうして父さんは死んだのか。

どうして父さんはこんな仕事なんてやってなのか。

——クソツタのゴミ野郎だな、俺は。

父さんがこの仕事をやっていたのは、単純に父さんの欲求の為だけじゃないはずだ。俺たちを食わせるためにも働いていたはずだ。それなのに俺は、父さんがヒーロー紛いの仕事なんてやってなければ、と思っっている。

嫌いだ。こんな俺は嫌いだ。

生きる為に金を稼いで、皆で生きていくのが目的だったはずだ。金を稼ぐのは手段に過ぎなくてかったはずなんだ。

けれどそれは目的にすり替わっている。

何をするにしたって、あの仕事が邪魔をする。何処か遊びに行く事なんてできないし、友達と遊べる事も少ない。金を稼ぐ以外、他にやる事がない。趣味をつくってしまえばいいのかもしれないが、けどそれって、俺が本当にやりたかったことじゃないんだ。

いつしか、金を稼ぐ事以外に目的がなくなっていた。

母さんには早くよくなって欲しいし、美希や善樹には大学に行つて欲しい。けど、俺自身に対する目標がない。金を稼ぐ意外にすることがない。

何のために生まれて、何をして生きるのか。

目的もなく、金を稼ぐために生きる。そんなの、馬鹿馬鹿しすぎるじゃないか。

——酔っているのかもな。

そんなに酒は飲んでいないし、俺は酒に弱くない。けど、そう思うことにした。そうしなければやっていけそうにな

か
っ
た。
。

起床、早朝出勤。

携帯の着信音で目が覚めた。

——誰だ……？

家の中で携帯電話の着信音になるっていうのは久しぶりだった。家族との連絡くらいにしか使っていなかった。寂しい二十歳だ。

携帯を開く。

「もしもし」

「やっと繋がったな」

その声の主は源さんだった。

「なんですか、いきなり……」

まだ眠い。まぶたが重い。寝ていたい。欠伸をこらえながら電話を握っていた。

「大事な話があるから、ちょっと顔出せよ」

唐突に源さんが言う。

「顔出せて、どこにですか。まだ朝つすよ？こんな時間から何を話すって言うんですか」

「決まってるだろ。支部にだよ。乃木も呼んでるから。とにかく、お前も早く来いよ。じゃあな」

通話が途切れた。むこうが切ったんだ。言いたいだけ言って、勝手な人だ。今に始まった事じゃないが。

時間を確認すると、まだ朝の六時だった。

いつもの出勤時間までには十分に余裕があるのだが、呼び出されたと会っては仕方がない。

俺はぬくぬくとして居心地のいい布団から這い出し、部屋を出てリビングへと向かう。

「おはよう、兄さん」

「もう起きてたのか」

そこには既に弟の善樹がいた。机に向かい参考書を開いている。その隣には既に書き込まれた計算用紙が数枚、きちんと重ねておかれていた。

「今日は早いね。どうかしたの？」

「たまには俺だって早く起きるさ。お前はちゃんと寝てるのか？」

俺が昨日寝たのは十一時半くらい。その時間になっても、まだ善樹は帰ってきていなかった。そっちはいつもの事だから心配はしていない。だが、こんな朝早くから勉強をしているのは知らなかった。俺はいつも、七時半くらいに起きるからだ。その時は善樹は一通りの学校へ行く準備を終えて朝飯を食べている頃。その前に勉強をしているなんて、知らなかった。

「寝てるよ。毎日四時間くらいは」

その睡眠時間は中学生としてどうなんだろうか。

「無理すんなよ」

なるべく健康な生活を送って欲しい。だが、善樹に何を言っても聞かないだろうと言う事はわかっていた。こいつも美希と同じだ。誰かが頑張るくらいなら、自分が頑張る。そういう奴なんだ。

善樹は塾に行く事だって拒んでいた。そんな金がかかることはしなくていいよ、と言って。

とはいえ塾で誰かに教えてもらえるのと一人でやるのは全然違う。だから俺は半ば無理矢理な形で、善樹を塾に通わせている。

「朝飯、昨日の残りでいいか？」

「うん」

俺は冷蔵庫から昨日の晩飯のカレーの残りを取り出した。二日間続けてカレー。我が家ではよくあることだ。

母さんが入院している今、食事を作ることができるのは俺しかない。その俺のレパートリーもたかが知れている。しかも味もよくない。だから、必然的に味がある程度ごまかせるカレーの頻度が増

えてしまう。おかずは冷凍食品だ。

「ご飯と共にカレーをレンジで温め、それをテーブルへと運んだ。

「ん、いい匂い」

善樹がシャーペンシルを動かす手を止め、教材を脇へと避けた。
「じゃあ善樹、俺、ちよつと外に出るから。皿は食い終わったら流しに付けといてくれ」

源さんに呼ばれているんだ。本当は俺も朝飯を食いたかったが、そんなにゆっくりしている時間はない。

「こんな朝早くから？どこに？」

「職場だよ。先輩に呼び出されちまったんだ」

「何それ、イジメ？」

「まあ、そんなもん」

俺は適当に返事を返しながら身支度を済ませる。寝癖が少々気になるが仕方がない。施設にはシャワールームがあるし、そこで直せばいいだろう。源さんの用事が終わってからでもいい。まだ朝は早いし、そこまで人目を気にする必要もない。

「ふうん。わかった。姉ちゃんには僕から言っとくよ」

「悪いな、助かる」

よくできた弟だ。物分りはいいし、我が侬も言わない。思えば善樹は生まれた頃からそうだった。夜中に泣きじゃくる事なんて殆どなかった。やめろと言えばすぐに止めた。反対に、美希は四六時中泣いていたのを覚えている。

「いつてらっしゃい」

「ああ、言ってくる」

わざわざ善樹が玄関まで見送りに着てくれた。
本当、よくできた弟だ。

会議と敵、そして秘密事項。

「遅いぞ、正輝」

部屋に入った俺に、源さんが言う。そのすぐ傍には乃木さんもいた。二人ともパイプイスに腰掛けている。

ミーティングルームの中には、俺たちのほかに五名ほどの科学者たちがいる。皆、白衣を着用していた。俺達には一切目もくれず、パソコンを操作して、スクリーンを準備し、トランシーバーで遠くの仲間と連絡をとりあっていた。

「一体なんなんっすか、こんな朝っぱらから」

まだ六時半だ。早朝出勤にしても早すぎる。普段ならどんなに早くても九時くらいなのに。

「大事な話だよ。電話でも言ったる」

「そんなんじや何もわからないっすよ。せめて、何に関係あるかぐらい言ってください」

「敵が動き出したんですよ」

口を開いたのは源さんでもなければ、乃木さんでもない。白衣を着た連中の、その一人だった。名前は確か、福地さんだ。

「敵って、ビーストのことっすか」

「ビーストよりも厄介な相手です」

即座にはその意味を理解できなかった。

福地さんの発言は、ビースト以外にも俺達の敵がいるってことを意味する。

敵がいる？あいつら以外にも？そんなの、聞いたことなかった。「親玉だよ。あいつらのな」

源さんが厳しい口調で言う。珍しい事だ。

まあ、それも気になるが、もっと気になる事がある。

「ビーストの親玉？初耳っすけど」

「言わなかったからな」

そんな、当然の事のように言われても。

「オリジナル、と私たちは呼んでいます。まあ、詳しい説明はこれから行いますので」

福地さんの言葉と同時に、部屋が暗くなった。スクリーンに青い光が映される。

近くにあつたイスに座る。少しして、この街の地図の画像が表れた。

「時間は真夜中の二時。幸い、一般人の目撃者はいませんでした」

福地さんが手に握るパワーポイントの赤い光が、ある地点を示す。

そこは俺の家の近くだった。全く気がつかなかった。

「発見直後、未確認ビーストを下水へと誘導しました。二階堂源がそれに対応、目標をオリジナルと判断しました。データー照合からも間違いではありません」

マンホールに擬態されている捕獲カプセル。そこから伸びるワイヤーでビーストを捕獲し、下水へと送りつけている。オリジナルとやらもそうしたのだろう。

地図は街中ものから、入り組んだ通路のようなものへと切り替わる。この街の下に広がっている、下水道の地図だ。

「戦闘開始から二分後、オリジナルが逃亡を開始しました」

パワーポイントが入り組んだ道を動いていく。けどその道、なんか最近通った覚えがあるような……。

「そして、早瀬正輝が前日に破壊していた地点から離脱」

「あ」

思わず声が出てしまった。

「その後、二階堂源が追うも、複数のビーストが出現。これと交戦状態となります。オリジナルはその間に姿を消しました。それから

すぐにビーストも撤退。どうやら目的はオリジナルの逃亡までの時間稼ぎだったようです」

福井さんが何かを言っていたが、あまり耳に入ってこなかった。やってしまった。最悪だ。俺のヘマのせいだ。オリジナルとやらがどんな奴かはわからないが、逃がしちやいけなかった相手のはずだ。俺が昨日、下水を破壊してさえないなければ、逃げられなかったはずなのに。まだ今月一回目だからと安心していたが、これだと減給もありうる。

「ここ数ヶ月のビーストの出現間隔が低下していたのは、オリジナルによって指示されていたためだと思われます。戦力の増強を行っていた可能性が高い」

「……戦力の増強……？オリジナルにも、そこまでの知能はなかったはずだが……」

「ある程度の知能を獲得したのだと思われます。二階堂源の報告では言語のようなものを呟いていたそうですから」

乃木さんの質問に福地さんが答える。どうやら、乃木さんもオリジナルとやらを知っているようだ。

「オリジナルは今もなお戦力の増強を続けているのだと思われます。あれが行動を止める理由も今更この街を離れる理由がありませんから」

「今後の対応はどのようにすればいいのでしょうか」

科学者の一人が手を上げて尋ねる。かけているメガネのレンズにスクリーンの光が反射していた。

「オリジナルの所在は掴めていませんが、あれの目標は一つだけです。先手を打つことはできませんが、準備を整え後手に回ることならば可能です。装着者は常時即出撃できるよう、待機。二階堂源のスーツは整備班がメンテナンスを行っています。終わり次第、装着してください。研究班は調査班から情報が入り次第、全て解析。以上です」

部屋が明るくなった。話は終わった、ということなんだろう。

詳しい説明、と言われたがまるで意味がわからなかった。なんとかわかった事と言えば、どうやら俺のせいでオリジナルとやらが逃亡してしまったと言う事ぐらいだ。

「あの、すみません」

そさくさとスクリーンやらなにやらの片づけを始めている科学者たちに向かい、俺は立ち上がって言った。科学者を代表してか、福井さんがこれ以上何か言う必要があるのか、という態度で俺に視線を向ける。

「なんですか？」

「一体なんなんっすか、オリジナルって」

福地さんの顔がしかめられる。何を言ってるんだこいつは、と半ば呆れているようでもあった。

いや、俺としては何言っただお前ら、って感じっすよ？

「最初に発見されたビーストですよ。私達が倒さなければならぬ、最終的な目標でもあります」

「いや、それはなんとなくわかったんっすけど。その、どこらへんが他のビーストと違うのか、とか教えて欲しいなあ、なんて」

少しの間があった。場の空気が凍った感じだ。え、なんだこれ。もしかして、聞いちゃいけないことだったのかもしれない。

「……君がオリジナルを知らないのかい？」

「ええ、まあ」

福地さんの声が呆れから驚きに変わる。そんなにまずいことなのか。でも、俺はそのオリジナルっていう名前のビーストの存在を今日知ったばかりだ。これまで、それらしい名前を聞いたことはなかった。

なのに、この周囲の反応は一体なんなんだろう。

福地さんが口を開こうとしたその時。

「お前は知らなくていいことだ」

源さんの声が部屋の中に響いた。源さんがイラだったような仕草で席を立つ。普段の源さんは他愛のない会話と冗談ばかり言うよう

な人なのに。

「お前らも。余計な事を言うな」

本当に、こんな事を言うような人じゃないのだけれど。

最初にビースト。通称オリジナル。

それ以外は全然わからなかった。けど、わかつうがわかるまいが、兎にも角にも、オリジナルと言う名前の敵が倒さなければいけない相手だということだけは確かなようだ。

整備室、同僚、スーツ装着。

更衣室でインナーに着替え、整備室に向かった。インナーは手と足以外を、完全に被っている。手首の先、足首までぴっちり。競泳水着をさらにフィットさせたみたいな感じだ。ちよつと、うるつくには恥ずかしい格好だと思う。

お世辞にも広いとは言えない通路を歩いていく。乃木さんは先に着替えを終えて整備室に行っていた。源さんは俺たちが更衣室に入るのとはほぼ同時に整備室へ向かっていた。

整備室のドアの前でＩＤカードを翳す。機械がカードの中のＩＣチップを認識し、ドアが横へとスライドした。

「ややつ、早瀬君じゃないですか。遅かったですね。さぼったのかと思いましたよ？」

部屋に入るなり声をかけてきたのは、つなぎを着た女だ。名前を桂木瑞穂という。瑞穂とかいう可愛い名前をしているが、ただのメカオタクだ。化粧なんかしたことないだろうし、現に見たことがなかった。髪の毛はボサボサ。ゴムか何かで後ろにまとめてポニーテールのようにしているが、オシャレのためにやっているわけではない。確実に。

部屋の中は薄暗い。所狭しと何かの機械もしくは配線が積まれている。

桂木は小規模な町工場を経営していた父親の影響を受け、物心つ

いた頃には既に機械いじりを始めていたらしい。中学、高校の間にラジオ大賞やロボットコンテストに応募したりして、その殆どで金賞をとっていた。それだけの実績を持っているため、高校を卒業した時はいくつもの有名企業から声が掛かっていたみたいだ。外国の大学からの推薦の話もあったらしい。

で、どうしようかと迷っている間に政府の人間にスカウトされたそう。なんで承諾したのかと言えばどうということはない、世間にも公表されていないような最新技術を扱っているから、だ。ようするに、桂木は機械をいじる事ができればそれで幸せなのだ。それが、こいつの生きる目的なんだ。

ちなみに、俺と桂木は同じ年でもある。

「サボるわけねーだろ。勝手なこと抜かすな」

「そうですか？まあ、そのへんはどうでもいいです。メンテは終わってるんで、早くこっちきてください」

「へいへい」

平均年齢が高いこの施設の中で、俺と歳が近いのはこいつと乃木さんくらいだ。スーツの整備班ということもあって顔をあわせる機会も多く、必然的に仲も良くなる。

「お、坊主。やっと来たか。少しばかりノズルの出力上げておいたぞ」

声をかけて着たのは同じく整備班の井出さんだ。整備班のチーフを任されていて、年齢はたしか六十を超えていたはずだ。顔にはシワがあるし白髪もあるし、でも、活力に満ち溢れている。

「マジっすか？ まだ俺には早いんじゃないですか、その仕様」

「調節がちよつと面倒になったが、その辺はOSがサポートしてくれるから問題ねえだろ。もう坊主もここに来て一年になるんだ。いい加減に色々と段階上げていかなきゃな」

「そりゃあそうですけど」

「はいはい、おしゃべりはその辺にしといて。おやつさんも、早瀬君はこれから装着なんだから。そんなに喋りこもうとしないでくだ

さいよ。正直邪魔ですよ」

「なんだとコラ。おい、瑞穂！」

「早瀬君、ほら早くこっちこっち」

井出さんは整備班の人たちにおやつさんと呼ばれている。職人気質で面倒見のいいところなんか、まさに下町のおやつさんだ。

桂木は井出さんのことをしょっちゅうからかっているが、技術的な面では尊敬している。実際、なんだかんだ言って井出さんの言う事は素直に聞くんだ。口では嫌なフリをするが、ちゃんと言われた事はやる。

部屋の奥は三畳ほどの広さのボックスが三つある。その内のひとつに入った。中心には鉄製の固定された背もたれのないイスがある。天井からロープで吊るされているのはスーツの両腕部だ。床には脚部の装甲が転がっている。壁には予備のスーツの部品が収納されていて、部屋の角にはヘルメットが転がっていた。

「……相変わらず、雑な扱いしてるな」

もう少し整理はできないのか、と半ばうんざりする。俺のスーツのメンテ及びボックスの担当は桂木だ。一応、自分で使った後は部位ごとにしっかり分けて片付けているんだと、こいつがメンテした後だとこんな感じで乱雑にばら撒かれているんだ。

「これは雑なように見えて、計算しつくされた配置なんですよ。例えばホラ、なんか適当な部位を言ってください」

「……じゃあ、ヘルメット」

俺の声を聞くと同時に、一切迷うことなく桂木が動いた。部屋の隅に転がっていた赤いヘルメットを取り出し、俺に投げってくる。

「ほい。これですね」

憎たらしいくらいのドヤ顔をして、ふふん、と鼻を鳴らしやがった。

くそ、こいつ。

「じゃ、ちゃっちゃとやっちゃいましょう」

俺は足元にヘルメットを置いて、鉄のイスに座った。

「ぐへへ……やっぱり一年前と比べて身体付きよくなりましたねー」

ロープで吊るされていた右腕部分を手に取り、桂木はそれを俺の腕部へと装着していく。口元は不気味に笑っていた。

「気持ち悪いぞ、桂木」

「いやいや。素直に早瀬君の成長を喜んでいたんですよ」

「お前がそんな奴かよ」

「心外ですねえ。私だって、たまには人間に興味持ったりもするんですよ？」

両腕と両足部分の装着が終わった。次は腰から下、太股辺りまでの部分だ。

俺は何も言わずに立ち上がる。桂木はその手に腰部分の部品を持っている。

スーツの総重量は二十キロを超えているだろうか。無茶苦茶に重い。まだスーツを起動させてもないから、強化スーツゆえの補助を受ける事もできない。一年前、初めて装着した時の事を思い出す。手があがらないわ、立てないわで、全てのパーツを装着するのに三十分くらいは掛かっていた。俺が準備を追えた頃には、源さんたちがもう敵を倒していた。

今ではちゃんとスーツの重さに耐える事ができる。日々のトレーニングの賜物だ。そういうことを考えたら確かに筋肉は増えたし、身体付きもよくなっている。

「ま、私の本命はメカですけどね。そこは例え早瀬君でも譲れません」

「勝つ気なんてさらさらねえけどな？ お前みたいなメカオタク、こっちからお断りだって」

「酷い言い草です。私だってまだ二十歳のうら若き乙女なんですから、もうちょっとデリケートにあつかってくれないじゃないですか」

「メカの調整の為なら三日三晩飲まず食わず、しかも不眠不休でいられるやつを、乙女とはよばねえんだよ」

「女は変わったところがある方が魅力的ですよ。無個性よりは個性です。おやつさんが言っていました」

「お前の場合は変わり過ぎだったの」

下半身に全ての部品が取り付けられ、そして胴体部分までの装着が終わった。後はヘルメットと、コアにあたる石だけだ。

俺の真後ろの壁側、そこにIDカードを翳す装置がある。桂木はそれに自らのカードを認証させ、淡く光る石を手にとった。スーツのコアだ。

ほぼ全ての乱雑に扱っている桂木も、それだけは大切に保管している。扱う手つきも慎重だ。

「一体なんなんだろうな、これ。適正とか関係あるのって、こいつのせいなんだろう？ たかが石のくせにさ」

ここまでやってきて、この意思に関する詳しい説明をされた事がなかった。源さんは政府の開発したエネルギー媒体とか言っていたし、科学者たちは数十年前に開発された兵器だと言っていた。井出さんは錬金術の賜物、と冗談半分で笑いながら言っていた。

ようするに、みんな言っている事がバラバラなんだ。本当の事を教えてくれない。

「さあ。私はあんまり興味ないですね。とりあえず、これのエネルギーを基にしてスーツが動いているって事くらいはわかりますけど」
「いつもスーツの整備やってんだろ？ その、他になんかわからないのかよ」

「コア部分の改良と整備は殆どおやつさん一人でやってますからね。ベテランの人たちならちよつとはわかるかもしれませんが。私はエネルギー効率のシステムと駆動形の、後はスラスタっていう、従来のメカの機能を発展させた部分が主なので。コアを使っているこのスーツにしかないような機能、例えば必殺技みたいなエネルギーを直接ぶつけるパンチとかキックとか、その辺のシステムは私の管轄じゃないんですよ」

「全くわからないってことか」

「ま、そういうことになりますね……はい、装着終わりました」

スーツが低い唸りを上げる。数秒後、身体が一気に軽くなった。強化スーツが起動したんだ。

「わからなくても、対して問題もないのです。私はメカさえいじればそれで。一応、今度暇があつたら、おやつさんに聞いてみますけど」

「そうか。そうしてもらえると助かるよ」

俺は足元のヘルメットを拾い、それを頭に装着する。

装着した直後は真っ暗なだった視界が、一気に明るくなる。目の前は桂木が立っているのが見えた。相変わらず色気なんてないような格好だ。まだ若いからなんとかなっているが、歳をとつたらこいつはどうなっちまうんだろう。素体はそんな悪いわけなんじゃないんだから、もうちょつと身の回りに気を使えばいいのに。こいつに言つても無駄だろうけど。

「お仕事頑張ってください。できればスーツを壊さないように」

「……いつも、スーツは壊してねえよ」

「そうでした。早瀬君が壊してるのは下水でしたね。損害賠償、そろそろ請求されるんじゃないですか？」

「問題ないんじゃないかな。多分……」

一ヶ月に一回までなら公共施設の破壊は黙認される。けど、今回はそれに対する被害が大きい。オリジナルとか言う奴を逃がしてしまったんだ。その辺の考慮されて、ペナルティが増えるかもしれない。

父さんの残してくれた貯金を使えばなんとかなる。なんとかならけれど、でも、できれば父さんの残した金には手を出したくなかった。

「ふーん。何か色々あるみたいですね。今度時間あつたら聞きましょうか？早瀬君のためなら、ちょつとくらい時間裂いてあげてもいいですよ。おやつさんも許してくれるでしょうし」

「まあ、大丈夫だ。悪いな。折角だけど」

むっ、と唸るような声をあげ、桂木は俺の胸部を叩いた。

「背負いすぎてもしょうがないですよ。たまには、どこかで毒吐いた方がいいです」

氣を使ってくれてるんだ。素直に嬉しいと思う。

けど駄目なんだ。俺一人で抱え込むから、なんとかなっているから。

感情をダムでせき止めてる。たまに溢れる思いはあるけれど、それでもなんとかなっている。どこかに溝をつくって少しでも感情を外に出せば、そこから一気に決壊してしまう。

だから他人には言えない。この感情は俺だけのものだ。

この悩みも苦しみも怒りも悲しみも何もかも、俺が一人で耐え切らなきゃいけない。誰かに漏らせば、俺はそのまま崩れてしまう。

「サンキューな」

俺は一言桂木に告げて、整備室を後にした。

出撃前、そして苛立ち。

待機室には乃木さんしかいなかった。

控え室と言っても、特に部屋の中には特に何かがあるわけでもない。壁に接したベンチが二つ。冷水気と個室のトイレがあつて、あとは入り口とは別に、もう一つドアがある。下水へと続く入り組んだ通路へと繋がる道だ。

俺は赤い色をしたスーツ、乃木さんは青い色のスーツを着ている。胸部にはあの石が収納されてる。内部に入っているから外からはわからないが、他の部位と比べ、その部分が僅かに膨らんでいる。

今はまだいないが、源さんは普段黄色いスーツを着ている。色が違うのは、視覚で相手が誰かを認識する為だ。あとは、パーツを取り間違えない為。

「源さんはまだつすか？」

「……来ていない。もしかしたら、まだ整備室にいたのかもしれない……」

まだスーツのメンテが終わってないのだろうか。源さんは複数のビーストと闘った、と言っていたし、その時、スーツの一部が故障したのかもしれない。

「あの、やつぱり、俺のせいですかね」

そうなったのも、俺の責任だ。金とかそんな事は関係はなく、取り返しのつかないことをしたんじゃないかと思う。

源さんが闘う羽目になったのは俺のせいだ。俺がもう少しちゃんと考えて闘っていれば、あの時加減していれば、下水が壊れる事はなかった。

源さんが俺のせいで大量の敵と闘う羽目になったんだ。源さんに

申し訳ないことをした。

「……お前のせいではないのかもしれないな……」

「でも、俺があの時、あの壁を破壊しなかったら」

オリジナルとやらは、下水から逃げる事はできなかったんだ。

「……いや……あそこは下水の中で、一番壁が薄い場所だった。お前が偶然そこを破壊して、オリジナルが偶然そこを突き止め脱出して、そしてオリジナルの逃げたコースで偶然待ち伏せが起こった……そう考えるのは、不自然だ……」

乃木さんの言っている事は、つまり。

「俺が壁を壊したのはビーストの誘導ってことっすか？」

「……オリジナルには知能が芽生えているようだからな……ありえない話じゃない……」

そのために、ビーストを一体を犠牲にしたって言うのか？

それって、俺たちがビーストを捕獲して下水に送り込むことを理解して、そして下水の中で壁の薄い場所を調べなければならぬじゃないか。さほど人間と変わらない知能を持っているんじゃないか？

「……そう考えれば……オリジナルは確実に壁を破壊できるように、一番経験の浅いお前の時を狙ったのかもしれない……」

俺の知っているビーストは、力こそ人間の何倍もある化け物だが、思考能力に関しては動物とさほど変わらない。そこが幸いして倒せている部分もある。

そのビーストに、人間並みの思考能力を持ち、管轄する親玉がいるのなら、それは相当に厄介だ。

「オリジナルって、一体なんなんっすか？」

ビースト達の親玉。人間並みの知能を持っている化け物。どうして俺は今までそんな奴の存在を知らされなかったんだろう。

「……それは俺の口からは言えない……」

「何ですか？さっきの源さんもでしたけど、なんか無理に俺に隠そうとしてないっすか？」

「……それは……」

乃木さんが躊躇いがちに口を開いたその時だった。

「俺が最後か」

源さんの声がした。ドアの方へ視線を向ける。

「あれ、源さん？そのスーツって」

そこにいた源さんは、いつもの黄色のスーツではなく、黒い色をしたスーツを着ていた。始めてみる色のスーツだった。胸の部分の、石を収納する部分が他のスーツよりも大きい気がする。

「……源さん、それは……」

乃木さんの声には驚きが込められてた。

「それなりの覚悟は決めとかなくちな、ってことだよ」

源さんが軽く笑う。特別なスーツみたいだ。何かいつものスーツよりも性能が高いのだろうか。

「ああ、そうだ。正輝」

思い出したように名前を呼ばれた。

「お前は絶対にオリジナルと闘うな。恐らく、奴は数体のビーストを陽動として使ってくるはずだ。そいつの相手をしろ」

そう、命令される。

まただ。違和感のようなものを感じる。無理矢理強制する事で、俺を何かから遠ざけようとしている。オリジナルって奴との接触を避けさせようとされるだけじゃなくて、それ以外のもっと別の何かから、俺を遠ざけようとしている。

「今日の源さん、おかしいっすよ」

気がつく俺は呟いていた。

「俺は今までオリジナルなんて知りませんでした。オリジナルって奴の事だけじゃなくて俺って知らない事沢山あるっすよね。今まであまり興味なかったっすけど何か隠そうとしてないっすか？」

ほとんど一気に捲くし立てた。無性にイラついた。

信用されないのかと思った。そこが、どうにも腹立たしかったんだ。

俺はこの仕事は嫌いだ。でも、皆は好きだ。源さんや乃木さんは

もちろん、一癖ある技師の連中、ほとんど喋らない監視員の奴ら、どこか鼻にかけたような科学者連中も、俺は嫌いじゃない。みんな、いい人だ。この仕事は最悪だと思うけれど、みんなはそうじゃない。それなのに、俺だけ蚊帳の外にいるような気がした。俺だけ何も知らない。俺だけ信用されていない。知るべきはずのことを知っていない。

「お前は知る必要のないことだ」

さっきの会議の時と同じような口調だ。

「必要なくなつて、教えてくれたつていいじゃないっすか」

源さんは俺の言葉を無視している。

一体なんなんだよ、これ。

色々と腹が立つた。

源さんが俺に何かを隠そうとしていることに対してだけじゃない。この仕事に、それを押し付けて死んでいった父さんに、それに対して苛立っている俺自身に。何もかもがムカついた。ダムから感情が溢れそうになる。それでも壊れはしない。俺一人で抱えている限りは。

俺は今、何をしてるんだ？

唐突に疑問が浮かぶ。

金を稼ぐ為に闘つて、それ以外何もしていない。けど、その唯一の事だつて満足に知らないで、流れに身を任せるように生きている。何のために生まれて、何をして生きるのか。それ以前に、今、何をしているのかすら満足に答えられない。

チクシヨウ。なんなんだよこれは。

腹が立つ。こんな中途半端な生き方を選んだ俺自身に。

《ポイントC-58にビーストが現れました。装着者早瀬正輝は至急、向かってください》

放送が流れた。俺一人、名指しで出撃命令だ。源さんが口ぞえしたんだろっか。それとも、源さんの思考とはまったく別の、戦術的判断なのだろうっか。

オリジナルとやらが通常のビーストよりも強力なのはわかる。それに対し、強い人間を当てるのは常識だ。そのために戦力を温存しておく。一番戦力的に低い俺が出撃する。

源さんの口ぞえでも、戦術的判断でも、どちらもありえることだ。どうせ考えてもまともな答えはでてこない。

「……いつてきます」

下水に通じる通路のドアを開け、部屋を後にした。源さんも乃木さんも言葉を返してはくれなかった。俺にうんざりしているとかそういうのじゃなくて、ただ、闘うべき相手に対して緊張していただけなのかもしれない。

猫と半魚人、二対一と必殺技。

ポイントC - 58はここから距離にして一キロメートルほどの場所にある。駅前から近い。結構、危険な場所にビーストが現れたな。俺は駆けた。この強化スーツならば一キロなんて一分もかからない。まあ、壁にぶつからないように加減速していかなければいけないから、実際は二分くらいだが。

壁にある装置でロックを解除し、通路の床にある取っ手を引き上げた。薄暗い下水が見える。俺はそこに飛び込んだ。汚水が飛沫を上げ、俺の身体が膝上までつかつた。

ヘルメットの視界を通常のものから暗視スコープへと切り替えた。目の前で黒と薄暗い緑が入り混じる。他の色はない。

《ビーストはその通路の先にいます。数は二。注意してください》
科学者の一人の声が聞こえてくる。男の声だ。一年前まではこういう手のものは女性が主にやるんだと思っていたが、俺の思い違이었다。別に男でも女でもあまり関係ない。

「了解」

二体か。きついな。

自分の右手を広げ、握り、そしてまた広げた。身体が動くって感じがする。これをやるのとやらないのだと、気の入り方が違う。ようするに、気分の問題だ。

今まで複数のビーストを相手にしたことはなかった。元々まとめて何対も出てくる奴らじゃないんだ。それに、俺が未熟だからというもある。半人前一人でいかにせるくらいなら、ベテランたちもつけたほうがいいだろう、という判断だ。

だから、複数のビーストと同時に闘うのはこれが始めてだ。

水が交流している丁字の通路を右の、水が流れていく方へと曲が
た。

低い唸り声が聞こえてくる。ビーストだ。

一体は半漁人のビーストだった。鱗の生えた身体に、胴体から伸
びた二本の脚と二本の腕。基本的には人間と同じ体のつくりをして
いる。首もある。けど、その顔は人間とは別物の流線型であり、臀
部には尾がついていた。手の平には水かきがある。足も同様なのだ
ろう。

もう一方は猫のビーストだった。虎やライオンとかじゃなく、猫
一度それらのビーストとは闘った事が会った。それと比べたら小柄
だ。半漁人のビーストと同じく、人間のような体付きをしている。
そこに猫の頭が乗り、鋭い爪を持った手があり、足があり、尾があ
り、毛皮に覆われた体がある。全身の毛が下水の水を吸って重そう
だ。他にも、ここにはゴミとか排泄物とかあるしな。

二体のビーストが俺に気がついた。二体が同時に襲い掛かってく
る。

「さっそくかよ」

一瞬で差を詰め寄せてきた猫が、鋭い爪を振り下ろしてくる。紙
一重でかわす。いや、少し掠ったか。

攻撃を外した事で、猫に僅かな隙ができる。そこを殴りつけよう
と、振りがぶる。

真横から衝撃を喰らった。蹴り飛ばされたんだ。すぐ隣の壁に叩
きつけられる。半漁人の仕業だ。

俺は体制を建て直し、即座に正面を向く。

《ポイントF-08に二体のビーストが出現しました。装着者、乃
木功治は速やかに迎撃に向かってください》

F-08は駅とは反対側の、ほとんど隣町に入る場所だ。俺達の
本部がある場所からは離れている。普段は本部の周りにしか出ない
のに。陽動作戦、ってやつなのか。俺達の戦力を分断させようって
ことらしい。

——だったら、こんな奴らさつさと倒さねえと……

半漁人が動いた。それを見て、俺は真横に跳ぶ。半漁人の体当たりを回避し、猫へ向けて切り返す。猫も接近してきた。右拳を放つ。しかしそれは避けられ、猫の鋭い爪が真っ直ぐに突き出された。右肩に直撃した。直接的な痛みはない。だが、衝撃と圧力としての痛みはある。

「ぐ……っ」

猫の突き出された腕を掴み、全力で横へと振るった。猫の身体が下水の壁に衝突する。

息を整えようとした瞬間、真後ろから突き飛ばされた。壁が目の前に迫ってくる。反射的に両手を突き左腕だけをバネのように伸ばして反転した。

しかし迫ってくる半漁人が映る。即座に真横に回避して、距離をとった。

俺とビーストは直線な通路の端と端にいた。距離は二十メートルくらいか。俺のあいづらも、即座には詰められないような距離だ。半漁人は追ってこない。どうやら猫が再び立ち上がるのを待っているようだ。

相手は二体。一体一体を相手にしているときは、勝手が違う。そこを頭に入れておかねえと。

二度も同じことを繰り返した。一方に気を取られ、もう一方にやられる。すぐに意識を切り替えないといけねえ。

——……早瀬、お前はもう少し落ち着いて闘った方がいい……

乃木さんの声が聞こえてきた気がした。わかってるっすよ、と心の中で返す。

そうだ。落ち着け。焦っても意味ないってわかってんだから。

猫のビーストが起き上がる。身体中の毛が汚水を吸って、僅かに膨張していた。全身を鋭く震わせ、それを全て落とす。隣の半漁人に僅かに掛かったが、半漁人は意に介していないようだ。ビーストだから、当然と言えば当然か。

そして、猫が跳躍した。弧を描きながら鋭い爪を持つその腕を振りかぶっている。続いて半漁人が真っ直ぐに突っ込んできた。小細工もなしに、ただ真っ直ぐ。

落ち着け。落ち着けばこんのくらい、大したことねえんだから。後方へステップ。落下しつつ振り下ろされた、猫の斬撃を回避する。派手に水飛沫が上がった。視界を暗視スコープからサーモグラフィーへ切り替える。こういった操作はある程度強く思い浮かべただけでOSが勝手に判断してやってくれる。

飛沫を押し分け、半漁人が俺の目の前に表れた。そのまま、体当たりをかまそうとしてくる。

半漁人の顎を殴り上げた。アッパーだ。その身体が浮く。俺の身体を飛び越え、そのまま俺の後方の下水へダイブした。

これで、少し時間が稼げる。

猫が接近してくる。その爪による攻撃を数度回避し、すれ違い様に腹を全力で殴りつけた。ビーストの身体がやすやすと吹っ飛ぶ。この強化スーツあってこそだ。桂木の整備のお陰と言うのもある。あの野郎は、何だかんだで俺が使いやすいようにと工夫してくれているんだ。例えば、まだスーツを使いこなせていない俺がシンプルに闘えるように、身軽さよりは純粋な打撃の機能を重視してスーツを改造している。

後方へ視線を向ける。半漁人がもう起き上がっていた。そちらに向かつて地面を蹴る。

背中ブースターを使った。一瞬で加速する。いつも以上だった。こいつが井出さんの言っていたノズルの出力を上げた成果なんだろう。

肘鉄を半漁人に叩き込む。よろめいたその胴体に、続けて数発。とどめに一発、蹴りを打ち込む。

息を整える。そうだ。こうやって闘っていけばいい。一度に両方を相手にしようとするからやられるんだ。

背後から水が飛沫を上げる音が聞こえてきた。猫のビーストだ。

ブースターを機動させた。圧の噴射で水を弾き飛ばす。猫との間に水の壁を作り、一瞬、ビーストの視界から俺を消す。こちらはサーモグラフィーを使用してるから、ビーストの存在が確認できる。猫のビーストの動きが止まった。

右拳にエネルギーを送り込んだ。そして、反転と同時に猫へ向けて一気に加速。飛沫の壁を貫いて、猫のビーストへと迫る。

俺に気がついた猫のビーストは対処しようと反応を見せるが、それよりも俺の方が早い。

猫の胸部に拳を叩き込んだ。轟音を立て、猫の身体が吹っ飛ぶ。三十メートル先の壁に激突し、そして爆発した。

桂木が言う所の必殺技だ。そう何度も使えるわけじゃない。フルパワーで使うのは一回の出撃で三度が限界だ。そう考えるとやっぱり、源さんが複数の敵を相手にしなくちゃいけなかったってのは相やばかった事だ。

次は半漁人だ。

俺はブースターを加速させ、半漁人に肉迫する。

半漁人が身を屈め、その身体を水面へと隠した。そして突っ込んでくる。

俺は跳躍し、ブースターをうまく使って水面の僅かに上を飛びぬけた。半漁人の突進を回避し、着地。即座に半漁人を追う。水中では横幅の狭い通路だと上手く方向転換ができないのだろう。そのまま半漁人は逃げていく。

「待てよ！」

言っても待つわけなんてないが、俺は叫んでいた。

膝まで下水につかる。そして、ブースターを全速力で吹かした。逃げる半漁人に迫りながら、今度は右足にエネルギーをためる。

半漁人が水中から飛び出した。逃げ切れないと判断したんだろう。振り向き様に、口から何かの塊を発射してきた。身体を左右に避けてそれを回避し、右足を振りかぶる。

半漁人はそれを避ける。行き場を失ったエネルギーが、下水の床

に叩きつけられる。だが、床は多少くぼんだだけだった。飛沫はそこまで上がらない。そうなるように調整したんだ。

着地と同時に、攻撃を回避したと思い込んでいる半漁人の身体を掴む。左手には既に十分なエネルギーが溜まっていた。本命はこっちだ。

半漁人の腹に左拳を打ち据える。膨大な量のエネルギーが半漁人の身体に送り込まれ、爆発した。

やった……のか……。

《新たにビーストが出現しました。装着者、早瀬正輝は至急補給受け、再度出撃してください》

間髪いれず、通信が聞こえてくる。どうやらビーストは休む間を与えてくれないらしい。

「……了解」

荒い息のまま、俺は走り出す。

撃破後帰還、整備と通信。

これで、七体目のビーストを倒した。あ後は半魚人と猫のビーストを倒した後は、一体ずつ、離れた地点に現れるようになった。こちらの消耗を誘っているのだろう。実際、相当に疲れた。休む暇がないのだ。源さんはオリジナルとやらとの対決に備えてか、動かない。俺と乃木さんで出現するビーストの全てを相手にしなければならなかった。

今複数体でこられたらやばいだろう。どうしてオリジナルってのがそうしないのかわからない。そこまで知能が回らないのだろうか。それとも、何か他の目的があるのか。

ともかく、一度本部に戻らなければならない。コアも新しいものを補給しなければ。

——コア、か。

エネルギー体。兵器。錬金術の賜物。そのどれもじっくりこない。このスーツの動力源であり、つまるところの必殺技を繰出せるのはこいつのお陰だ。ただ、使い捨ての電池のようなものかと言われたらそうではない。一度に使えるエネルギーの総量はある程度決まっているみたいだが、何度も使いまわしているみたいだ。充電式なのか？

かれこれもう、四時間は闘っているだろう。疲労はピークに達していた。できる事なら、もうこのまま眠ってしまいたい。

ただ、下水のと真ん中で眠り込むと言うのは心情的に勘弁したい。

せめて、控え室に戻ってからだ。

ブースターで加速し、惰性で身体を走らせる。

本部の真下へとたどり着く。壁に擬態してあるパネルを操作した。低い音を立てて天井が横にスライドする。五メートルくらいの高さを跳躍し、下水から通路へと移る。今度は通路の壁にあるパネルを操作して、下水に繋がるドアを開めた。

ヘルメットを上げ、一息ついた。下水の匂いがしたが、気にしてられない。蒸れて扱ったんだ。インナーは汗まみれた。

「……戻りました」

待機室の扉を開いた。

部屋には誰もいない。源さんが出撃している。

……オリジナルつてのが現れたのか。

俺に与えられた命令は補給を済ませ、待機することだ。待機室を出て整備室に向かった。コアを取り替えてもらう為にだ。

源さんは俺に何かを隠している。多分、どんなに聞いても教えてもらえないだろう。オリジナルの事だけじゃない。コアの事だってオリジナルの事だってコアの事だって、父さんのところすらも、俺の知らない所で物事が進んでいた。俺は生きていくので精一杯だ。金を稼いで家族に人並みの暮らしをさせるのが限界。俺は俺を殺して、目的と目標がごちゃごちゃになって生きている。

「ご苦労様です。どうぞ座っちゃってください」

廊下に桂木の顔が見えた。ひらひらと手招いている。桂木に言われるがまま、そちらへと向かい、整備室に入っていた。そして、自分のボックスの中に入り、座る。

「こんなに多く出撃したのは初めてですね。大丈夫ですか？ あ、コアの前に右腕の修理やちやいますね」

俺が口にする前に、どうやらスーツの故障に気がついたらしい。相変わらずメカの事に関すると鋭い嗅覚をしている。

「微妙……いや、正直限界だわ」

弱音を吐いた。自分でもわかる。

「早瀬君がそんな事言うなんて珍しい。敵もそれだけ本腰入れてきているって事なんですかねえ」

桂木はスーツの内部に収納されているコアを取り出した。新しいコアがその手には握られている。

「ああ、そういえば二階堂さんが出撃したみたいですね。おやつさんが言っていました」

「そう見たいだな」

オリジナルってのはどんな奴なんだろう。これだけの数のビーストを束ねる事のできる敵。それくらいしかわからない。

「本当に疲れてますねえ」

まあ、と返事を返すのすら億劫だった。

それにしても、源さんは大丈夫なんだろうか。俺や乃木さんより経験があるし強いことは間違いない。ベテランというやつだ。あの黒いスーツは秘密兵器かなにかなんだろうし、勝算があつてのことなんだろう。

「終わりました。こつちのコアは回収しておきますね」

「サンキューな」

さつき、桂木は俺のことを疲れていると言っていたが、桂木の顔だつて十分に疲れて見えた。それもそうだろう。俺と乃木さんがかわるがわるにやってくるんだ。井出さんを含んだベテランの人たちはコアの整備に追われている。

「ああ、そういえば。コアの事、ちょっと聞きましたよ」

「マジか？」

本当にちよつとだけですけど、と桂木は前置きしてから言った。

「やっぱりこれは、ただのエネルギー体みたいですよ。というか、これ自体には多分、適正なんて関係ないですよ」

「……何だつて？」

「おやつさんたちが予備のスーツでテストしているのを見ましたから。多分、適正云々ってのはないんじゃないでしょうか。予測ですけど、ほぼ確実だと思います」

どういうことだ？ 俺は始めてここにきた時、「君には適正がある」と言われたんだぞ？ あれは才能とか素質とか、そう言った類の意味じゃなかったはずだ。

「あと、これはコピーみたいなものらしいですよ。元となった石があるみたいです。聞けたのはこれくらいで、申し訳ないんですが」

「いや、十分だ。悪いな、忙しい時に」

「いえいえ。私も気になってた事ですから。それに、愛しい早瀬君のためならこれくらいなんてことありません」

桂木がわざとらしく身体をくねらせる。恥じているつもりなんだろうか。

「そういうジョーク、いらねーから」

「あれ、やっぱりバレました？」

ふふふ、と桂木が笑う。普通にしていればこいつだって可愛いのに。

ちょっと喋ったことで気が楽になった。疲れは残っているが、それでも少し和らいだ気がした。

このまま戦いが終わってくれればいいと思う。これ以上戦いたくはなかった。

けど、そう簡単に物事が運ぶわけがない。そして、こう言うときは最悪のパターンになるんだ。

《早瀬正輝！聞こえるか！？》

突然、耳元ででかい音がした。福地さんだった。音の発信源はヘルメットだ。

「なんですか、いきなり」

福地さん通信をしてくるってのは珍しい。いつもは部下の科学者に適当にやらせているんだ。

《今すぐポイントB-05に向かってくれ！今すぐにだ！》

相当、切羽詰っているみたいだ。福地さんの声以外にも、罵声が飛びかっているのが聞こえた。でも、一体何が？

《二階堂源が危ない！このままだとオリジナルに殺される！》

一瞬、頭が真っ白になった。

オリジナル、赤い光、ヘルメットのヒビ。

人が死ぬ。

それはいつか必ず来ることだ。ある日気がつかない間に、過ぎ去っている事かもしれない。

実際、父さんはそうだった。勝手に、知らない所で、わけわからない事情で死んだんだ。

今度は源さんがそうなるうとしてる。

ふざけんな。そんなのあつてたまるか！

ポイントB - 04つてのは俺が下水の壁を破壊した地点近くだ。もしかしたら、オリジナルつてのはあの穴から進入してきたのかもしれない。

自分から？何のために？

それを源さんが対処しに向かった。そして今、やられかけている。どうして？源さんみたいに強い人が？

俺たち三人の中で、一番強いのは源さんだ。それは間違いない。

その源さんがやられている。信じられるかよ、そんなことが。

でも、だったらどうして源さんは死にかけているんだ？

自問自答を繰り返している。その答えを明確に出さないまま、新しい疑問が浮かんでくる。

下水の中を全力で駆け抜ける。息が上がる。肺が苦しい。心臓が張り裂けそうだ。

道を曲がる。先を走る青いスーツが目映った。目の前のモニターが、乃木さんの名前を表示している

「乃木さん！」

たまらず叫んでいた。乃木さんが立ち止まる。

「……早瀬……お前、どうしてここに……」

「源さんは、源さんは大丈夫なんっすか!？」

乃木さんの言葉を遮るように、俺は叫んでいた。感情が抑えられない。

「福地さんが言ってたんっすよ。源さんが死にそうだって。殺されそうだって。そんなことあるわけないっすよね?あの源さんが、殺しても死なないような源さんが、ビーストなんかに殺されるないっすよね?」

源さんはいつだってビーストに負けた事がなかった。複数のビーストに囲まれた時も、俺を庇いながら、それを全く苦にせず闘っていたんだ。あの人が負けるわけがない。ましてや、死ぬなんてこと頭の中を駆け巡っていた言葉があふれ出てくる。そんなのあるわけないって。嘘に決まってるって。

でも、乃木さんは静かな口調でこう言いつたんだ。

「……早瀬、お前は帰れ……」

体を巡る血が一気に冷えた気がした。

乃木さんは俺の言った事を否定しなかった。それはつまり、源さんが殺されそうになっているって事で――

嘘だ。嘘に決まってる。だって、そうだろ?ありえるわけがないんだ。

源さんが死ぬなんて。

俺はたまらず走り出した。本当の事を確かめる為に。

「待て、早瀬!」

乃木さんの声が聞こえた。後方から追ってくるのがわかる。でも、そんなことどうだっていい。

確かめなくちゃならないんだ。俺の自身の目で。

父さんの時みたいなのは絶対に嫌だ。俺の知らない所で勝手に始まって勝手に完結して、そんなの絶対に認めない。

薄暗い下水の中、僅かな光が水面に反射していた。上からの、網状のから漏れる光じゃない。真横からの光だ。俺がぶっ壊した壁から、入り込んでいる光。

息を切らしながら俺は道を曲がる。

そこには二つの影があつた。

一つは黒いスーツが傷だらけになり、宙に浮いた源さんが。

そして、もう一つは、白い色以外が俺達が使っているのと同じ、強化スーツが。

そいつが、源さんの首を絞め、吊り下げていたていた。

思考が一瞬停止する。なんで、敵がそれなのか、理解できなかったんだ。

俺たち以外の装着者？いや、そんな話聞いていない。それ以前に、あいつは何をしてるんだ？

《そいつは敵だ！そいつがオリジナルだ！》

福地さんの声がヘルメットの中で響く。その声に突き動かされるように、俺は地面を蹴っていた。

あいつは今、源さんを殺そうとしてる！

「あああああああああああ！！！」

滅茶苦茶に喚きながら、白いスーツの顔面に向かって飛び蹴りをかます。

直撃だった。俺の全体重が、そいつの顔面に打ち込まれる。

オリジナルと呼ばれた、そいつの身体が吹っ飛んだ。その手から源さんが離れ、下水へ音を立てて落ちた。俺は着地し、素早く源さんを抱き上げる。

「源さん！源さん！」

俺の声が下水に木霊した。続いて、水を書き分ける音が聞こえてくる。乃木さんの足音だ。

「……正輝、か」

乃木さんがやってくるのとはほぼ同時、うめき声と共に源さんが咳いた。

よかった。生きてる。源さんは、生きてる！

「うつ……お前ら……」

源さんが途切れ途切れに告げる。そして小さく息を途切れさせ、その身体がそけぞった。

「あ……が……っ！」

源さんが身体を悶えさせる。何かに苦しんでいた。小さく摩擦した叫び声が聞こえてくる。

そして、俺は気がついた。

「乃木さん、これは」

黒いスーツの、源さんの身に纏う装甲の胸部から、赤い光が漏れ出していたのを。

「……拒絶反応だ……」

「拒絶反応？」

胸の光はさらに強くなっている。そしてもう一つ。赤い光が視界に映った。

そっちに目を向ける。オリジナルだ。オリジナルの胸部が、赤く光っていた。

「駄目だ……早く……逃げろ……っ！」

ゆらりとオリジナルが動いた。前のめりに倒れるように。そして瞬間、俺の真横を風が掠める。

オリジナルが動いたんだ。そう気づいて視線を移すと、俺の背後で、オリジナルによって乃木さんが壁に叩きつけられていた。

一瞬の出来事だった。

「乃木さん！」

乃木さんの身体がコンクリートの壁に僅かにめり込んでいる。乃木さんのスーツが破損し、モーターが奇妙な唸り声を上げていた。

オリジナルが俺へ胴体はそのままに、まるで蛇のように首だけを向けた。顎を前に突き出し、観察するように俺を見ている。

オリジナルの顔面はヘルメットに覆われている。だから、直接目が見えるわけじゃない。でも、確信があった。こいつは今、俺を見

ている。

一步、オリジナルが足を踏み出した。水面が動く。源さんとオリジナルの胸の光はさらにつよくなっていた。

「……待て……」

オリジナルの動きが止まった。乃木さんがオリジナルの手を掴んでいたんだ。壁から身体を這い出し、水面へと立つ。

「アガ……ウア……」

オリジナルが言葉になっていない言葉を吐き出す。赤ん坊が無理矢理言葉をひねり出すのに似ていた。

オリジナルが跳ぶ。

一瞬で天井まで跳躍、そして反転。今度は天井を蹴って乃木さんに突っ込んでいく。

乃木さんは僅かに後方へ回避する。オリジナルが飛沫を上げつつ地面に激突し、間髪いれずに乃木さんに向かってまた跳ねた。

乃木さんがブースターを吹かした。

左右のブースターを上手く調節し、オリジナルの突撃をかわした。そのまま背後へと回り込む。右腕にはエネルギーが籠められていた。

「……喰らえ」

ブーストを吹かし、乃木さんがオリジナルへ接近。コアのエネルギーが籠められたその一撃が、オリジナルに叩き込まれた。

下水の中が明るくなる。爆風が周囲の水位を一時的に低下させる。轟音が起こり、そして視界が真っ白になった。

「まだだ、乃木……」

かすかに源さんが呟いた。その理解をする前に、再び轟音。「ぐっ……」

乃木さんの呻き声が聞こえてくる。飛沫が再び上がった。

乃木さんの身体が水中に叩きつけられたのだ。オリジナルによって。

「ガッアガッ」

オリジナルは乃木さんの胴体を右手で押さえつけながら水面に這

い蹲り、胴体の半分近くを水中にうずめていた。

あの一撃をくらったというのに、ほぼ無傷だった。装甲に多少汚れはあるが、破損はない。俺たちのスーツと強度が違いすぎる。全く別のものなのか？

《早瀬正輝、逃げるんだ！そいつは君だけで敵う相手じゃない！》

福地さんの言うとおりだろう。俺がこんな奴と戦って、勝てるわけがない。勝てるはずがない。

「アヒヤッ」

気色悪く声でオリジナルが笑う。

身体が動かなかった。恐怖で足が竦んでいた。圧倒的なまでの力量差。源さんも乃木さんも敵わなかった相手だ。勝てるはずがない。

——殺される。

「ひ……っ」

動かなければいけないとわかっているのに、身体が動かない。源さんを死なせるわけには行かないって思ってたはずなのに、立ち上がることができない。

「好き勝手しやがって……」

源さんがゆっくりと身体を起した。その胸部は未だに赤く光り輝いている。

源さんの肩が激しく上下しているのがわかる。辛いんだ。

呼吸を荒げて、それでも痛みに耐えてたがちがったんだ。

「ギヤハッ！」

オリジナルが源さんに向かって飛び掛る。源さんは一歩も動かなかった。避ける素振りを見せず、ただ立っているだけ。

「源さんっ！」

俺がそう叫んだのと同時に、オリジナルの動きが鈍る。

「……待てと言った……」

乃木さんがオリジナルの身体を掴んでいた。オリジナルが意識をそっちに向ける。隙ができた。

「ナイス、乃木」

源さんの右拳は真つ赤な光が収束していた。そして一步、二歩と踏み出し、オリジナルの顔面を殴りつける。

赤い閃光が走った。オリジナルの顔面に源さんの拳が食い込む。水平にオリジナルが吹っ飛んだ。それに巻き込まれて、乃木さんも衝撃を受ける。直撃をしていない分、衝撃は少ないだろうが、それでも相当なものだろう。

乃木さんの身体が水中へダイブし、それでもなおオリジナルの身体は勢いを失わない。十メートルほど先の壁に、白い装甲が激突した。

やった、のか。

「あつ……ぐつ……」

源さんが膝を折る。

「おい、正輝……」

今にも消えてしまいそうな声で、源さんが俺の名前を呼ぶ。

「……早く逃げろ……」

「え？」

何を言ってるんっすか、敵なら源さんたちが倒したじゃないっすか。

そう俺が言う前に、下水を何かが這う音が聞こえてくる。

蜘蛛のように、オリジナルが四つんばいになって這い寄ってきていた。

「な……っ」

そいつは俺には一切目もくれず、膝を尾折る源さんの頭をその手で掴んだ。

そして、それは何度も何度も地面に叩きつけられた。源さんが程なくして気を失う。その身体からは力がなくなり、まるで死体のようで――

「アギャツ！ギャギャツ！」

源さんが闘えなくなった事を理解したのか、オリジナルは源さんを投げ捨てた。その身体が壁に激突し、重力に負けて水面へ落下す

る。

オリジナルが視線を俺へ向ける。

俺の目の前を、オリジナルの手の平が被った。尋常ではない握力でヘルメットを握られる。

俺の身体が壁に押し込まれた。

潰される。殺される。このまま、終わる？

なんだよこれ。死ぬのか？殺されるのか？意味わからねえよ。ふざけんなよ。死ぬ？終わる？嫌だ。嫌だ。嫌だ！

気がつくとも身体が宙に浮いていた。吊るされていた。最初にオリジナルを見つけたときのように。

ヘルメットにヒビが入った。程なくしてそれは割れる。右半分が晒された。

「ウ……ア……？」

突然、オリジナルの握力が弱まった。俺の身体が地面に落とされる。俺はそのまま尻餅をつき、オリジナルを見上げる形となった。

なんだ、いきなり？ 一体、何が……

その時、俺は見たんた。

俺が昨日ぶっ壊した場所から差し込む光が、オリジナルのヘルメットを照らしていた。源さんの一撃によって左半分が壊れたヘルメットは、オリジナルの顔を顕にしていた。

どうして。そんな。ありえない。

気が狂ってしまつて視覚までおかしくなつたのかと思つた。ありえないはずなんだ。

だつて父さんは一年前に死んだんだ。

オリジナルのヘルメットが完全に割れた。

その顔が完全に明らかになる。

「マ……サ……キ……？」

父さんの顔をしたそいつが、俺の名前を呼んだ。

採血と真実とエリクサー。検査室にて。（前書き）

これから終盤です（予定）。

トンデモ設定投下します。

果たしてこの詰め込み方は大丈夫なんだろうか……

採血と真実とエリクサー。検査室にて。

何がなんだかわからなかった。

滅茶苦茶だった。全てが歪んでひん曲がっているように感じられた。

気持ちだけで一步も動けなかった俺。

死にかけた乃木さんと源さん。

オリジナルと言う敵。

そして、その正体。

あの顔は紛れもなく父さんだった。見間違ひなんかじゃない。髭も髪も伸びていたけれど、アレは絶対に、父さんだった。

そして何より、あの、父さんの顔をしたあいつは、俺の名前を呼んだんだ。

「アレは敵だよ。早瀬正輝」

福地さんが淡々と告げる。その横には数人の科学者と、井出さん達数人の技師がいた。桂木もいる。

源さんや乃木さんはいない。二人とも、今はこの施設の中にある集中治療室にいる。

あの後、オリジナルは何もせずに意味不明なことを喚き散らしながら、去っていった。記憶の混乱だ、と福地さんは言っていた。オリジナルに父さんの記憶が逆流したんだそうだ。

「かつての第二次世界大戦中、日本は当時の最先端医学、生物学、機械学、あらゆる手段で新型兵器を開発しようとしていた。既存の確立された技術だけではなく、錬金術や果てには民間伝承や神話までもが視野にいれ、研究がなされていた。時には非人道的な実験も行っていたようだ。結局、そのほとんどが実装配備を待たずに、敗戦となって闇に葬りさられたがね」

俺の腕にはいくつかのチューブが刺さっていた。俺に適正がある

かどうか、再度検査をしているらしい。

廃棄されたはずの研究資料。しかしそれは、秘密裏に保管されていた。

「人の好奇心とは恐ろしいものでね。敗戦後も実験は続けられていたんだよ。目的はただ一つ、未知なる兵器の完成。アメリカに対抗しうる力を手にいれる、それだけのために」

その結果、生み出されたのが二つの兵器——最初のビースト、つまりオリジナルであり、コアの元となった、今俺の目の前にある赤い石であるという。

「ビーストとは元々、宿主に寄生し脳を乗っ取る一センチにも満たない生態兵器だったんだ。元はアマゾン奥地に生息していた寄生虫らしいが。脳を乗っ取られた生物は思考能力を失い、身体のコントロールを奪われ、本体の手足となる。オリジナルとは厳密にはその寄生虫の事を言うんだ」

今まで現れていたビーストは、オリジナルの産えつけた卵から生まれた幼虫に寄生されたものだという。幼虫が成虫になるのには十数年を要するそうだ。

「今君の目の前にある、赤い石。エリクサーというんだが、これは錬金術の賜物でね。賢者の石とも言えいいのか。正直、こんな非科学的なことは言いたくもないし、信じたくもないんだが、これは人間の魂をそのままエネルギーに変換する装置なんだよ」

刻み込まれた適正者以外、その全ての他者の生命を吸い取り、自らのものに変換する石。現代科学では立証不可能な、錬金術の賜物。「四十年以上も前になるか。その当時の日本はアメリカへの反撃をもくろんでいてね。君の祖父にあたる、富豪だった早瀬^{はやせたいき}醒貴に研究を秘密裏に依頼していたんだ。そして、完成してしまった。オリジナルは実験動物のうちの一体に寄生して施設破壊し、逃亡。エリクサーそのまま残された。実験結果は全て燃えて消滅してしまったがね」

俺が産まれるずっと前の話だ。父さんがまだ小さかった頃の話で

もある。

「エリクサーは政府に回収された。生き残った研究者の証言を元に、エリクサーの成分を解析した。その結果、エリクサーに刻まれた適正者というのは早瀬家の血統——つまりは、君の父親に当たる、早瀬光輝さん以外にはいなかったんだよ。オリジナルが逃亡の際に、早瀬家の人間は彼以外全員頃されていたからね。君の祖父は、早瀬醒貴は、自分の息子に対アメリカの兵器にしようとしていたんだよ。自らが英雄として祭り上げられる為に」

だから、父さんはこんなヒーロー紛いの事をやっていたんだ。父さんがやるしかなかったから。

「数年後、オリジナルが寄生した生物を発見した。というか、エリクサーを求めて向こうからやってきたんだ。当時、オリジナルは死滅したものだと思われていたからね。騒然としたそうだよ」

他者の生命を吸い取り、自らのものにするエリクサー。それをもしも取り込むことができれば、それは不死身の、完全な生物の誕生を意味する。オリジナルはエリクサーを求めていた。より、自らを完璧な生命体として進化させるために。そう、福地さんは言った。

「ただ、通常の兵器ではどうしてもオリジナルを倒せなかったんだ。生命体の脳内分泌をコントロールして尋常はない回復力を見せてくる。一瞬でも隙があれば、周囲の生命体に寄生して逃げてしまう。

エリクサーの凝縮されたエネルギーを直接叩き込む事でしか、オリジナルは倒せないんだ」

オリジナルは成体となり、別のビーストを生み出すようになった。成体自らが動物に寄生して脳をいじくり、異形のものへその姿を変容させ、幼虫を寄生させる。

「大量のビーストは、もはやエリクサーの力を使わなければ倒せない。そして、エリクサーを使えるのは当時、君の父親だけだった。初期型のパワードスーツが開発され、その動力にはエリクサーの欠片が採用されたよ。開発及び実験の過程で、数百くらいの命を使う羽目になったそうだけだ」

そのパワードスーツを着て、父さんは闘った。エリクサーを狙うビースト共と。そして、オリジナルと。

「それから十数年経過して、スーツは幾度も改良された。エリクサーのレプリカも作られた。これは君らがコアと呼んでいるものだ。エリクサーのエネルギーを溜め込むことができる。それ以外は特に何もできないが、早瀬家以外の人間でも闘えるようになったんだ。二階堂源、乃木功治といった人材を採用できるようにもなった」

それでも、あくまでも動力源はエリクサーの生み出すエネルギー。いや、この場合は奪い取ると言った方が正しいか。

「効率よくエリクサーのエネルギーを補給する為に、エリクサーは街の地下に保管される事となった。ビースト共はエリクサーを求めてこの街に現れる。それを迎撃すればいいわけだから、都合がよかった。これだけ人間が近くにいれば、日々少しずつエネルギーを分けてもらうだけで十分な力が得られる。少し離れた場所には巨大な駅もあるし」

数年が経過し、その間も父さんたちはビーストたちと闘い続けた。人知れず、その命の力を僅かにも奪っていきながら。

「そして、一年前。誤算が起きた。あの日、オリジナルたちはここから離れた場所に出現したんだ。それまでも数回、そのような行動パターンはあった。恐らく、めばしい寄生対象を見つけるのはこの付近だけでは不便なのだろう」

俺もそうというのは何回か経験している。下水で闘えない場合は、こちらから出向くのだ。幸いにもそういうときにビーストが出現するのはここから離れた山の中だから、人目はあまり気にせず闘える。「あの時、早瀬光輝の体調は万全ではなかったが、オリジナルを殲滅する絶好の機会だったんだ。前日には致命傷に近い傷を与える事ができていた。一年前までは、エリクサーのレプリカでもオリジナルにダメージを与える事ができたから、二階堂源と乃木功治の二人がいれば、問題ないと判断したんだ」

実際、その判断は間違ってたのだろう。戦闘は上手くいっ

ていたようだ。戦いの最中に、民間人さえ現れなければ。

「瀕死の重傷を負ったオリジナルは、偶然現れた人間に襲い掛かった。早瀬光輝はそれを庇い、そして、寄生された。スーツのほんの僅かな隙間からオリジナルは早瀬光輝の身体を乗っ取り、逃亡したんだ」

俺は父さんは死んだと告げられた。でも違う。本当は、父さんは死んだんじゃない。父さんが父さんでなくなっただんだ。

検査が終わる。俺の腕からチューブが引き抜かれた。一瞬痛みが走る。血の滲む右腕を、科学者の一人がガーゼで被ってくれた。

「それからというもの、オリジナルは現れなかった。これは推測に過ぎないが、早瀬光輝の意識が抗っていたのだと思う。だが次にいつ現れるかわからない。欠片とはいえ、エリクサーを手に入れたオリジナルに対抗するには、こちらもエリクサーで立ち向かうしかなかった。だから君が誘われたんだよ、早瀬正輝」

源さんは多分、この事実を俺には知らせたくなかったんだ。それでも、俺を巻き込まずに入らなかった。それでも、父さんの事だけは隠そうと、だからオリジナルの事やコアのことを俺に言わなかったんだ。

「やはり、君にはエリクサーに対する適正がある。二階堂源にはなかった適性がね。あの二人が倒れた今、君にエリクサーを使ってもらうよ。君は、そのためにここにいるんだから」

採血と真実とエリクサー。検査室にて。（後書き）

感想、批評、誤字脱字、その他諸々、お願いします。

スーツ着用問題なし、謝辞と感謝。

父さんも俺と同じだったんだ。自分で決めた事ではなく、決まったことを強いられていた。

いや、むしろ、父さんの方が俺よりも最悪の状況だと言った方がいい。

確かに、俺は父さんから父方のじいちゃんの話聞いた事はなかった。父さんの方の親族とあったこともなかった。父さん以外、誰もいないからだったんだ。

俺は今まで、父さんが自分から進んで闘って痛んだと思っていた。だから父さんが憎くもあつたし、ねたんだりもした。自分勝手に死んでいった男だと、心の中で毒づいた事もある。

違う。全然違かったんだ。

俺よりも、最悪の状況の中、それでも父さんは闘った。闘って、闘って、闘って。一瞬たりともそんな素振りは見せず。

整備室のボックスの中で俺は座っている。目の前には井出さんと、数人のベテランが。扉付近には福地さんもいる。科学者チームの代表として身に着たんだろう。桂木は部屋をせわしく動き回り、井出さんたちに工具やパーツを手渡していた。

「坊主、調子はどうだ」

右腕の調整を行っしながら、井出さんが尋ねてくる。特に何も、と答えた。俺は今、黒いスーツを身にまとっている。数時間前まで源さんが着ていた奴だ。

大体の昨日は普段着ている、赤いスーツと同じだ。ただ、動力源が違う。

赤く輝く胸部には、エリクサーが埋め込まれている。

父さんが着ていたスーツを元に造られた、二号機と言えばいいの

か。白いアレは一号機。元々、これの二号機は俺のために造られたものなんだそうだ。源さんにエリクサーは扱えない。拒絶反応というが出ていた事からも明らかだ。

それでも、源さんは闘おうとした。俺を何も知らないまままでいさせるために。

「よし、立つてみる」

整備を終えたのか、井出さんが促した。

「適正的には問題ないはずだ。スーツの整備も万全だ。だが、エリクサー^{いう}にや何があるかわからん。実際、仕組みはわかっていても造り出すことはできないしな。異常があつたらすぐに言え」

「了解つす」

俺は立ち上がり、右手を動かす。方を回し、首を捻る。足を動かし、数回飛び跳ねる。

大丈夫だ。何も問題はない。それよりも力が沸いてくる気がする。レプリカであるコアと、その元であるエリクサーの違いなんだろう。「……すまないな、坊主。お前ら親子には、こっちの都合を勝手に押し付けちまつて」

井出さんが頭を下げる。他の技師も同じように頭を下げていた。

「やめてくださいよ、そんなの」

「それでも、だ」

井出さんたちには思うところがあるんだろう。暫く、そうしたままだった。

でも俺は、そんな事してもらつ資格なんてないんだ。

今までずっと、こんな境遇を憎んで生きてきた。こんなはずじゃないって。こんなの間違っているって。だったら、父さんは？

先祖の尻拭いを押し付けられて、俺よりもきつと最悪な思いのまま闘って。

俺はそんな立派じゃない。その礼を受けなきゃならないのは父さんだ。

「準備は終わりましたか？」

技師たちの間を掻き分け、福地さんがやってくる。

「ああ。やれるだけのことはやった」

「ありがとうございます。それでは、早瀬正輝はお借りしますよ」
有無を言わず、福地さんが俺の手を引つ張る。前につんのめり
そうになり、それをなんとか右足を踏み出して耐えた。

強引な人だな、と思いつつ福地さんの後についていく。整備室を
出て、廊下を歩く。

「あの！」

整備室の方から声がした。桂木だ。

「あの、すみません。早瀬君、本当に疲れてるんです。ちょっとで
いいから休ませてあげてください」

「……悪いな、桂木。でも、心配すんな」

こいつは本当にいい奴だ。最初あったころはとんでもないメカオ
タクと出会っちまったと思ったが、長い間いるとわかる。基本的
には真人間なんだ。ちょっと趣味がおかしな方にいつちまっているだ
けで。

「今の彼にはエリクサーがありますから。疲れと言うものは存在し
ません」

福地さんは桂木を一瞥もせず、歩いていく。

福地さんの言うとおりだった。

「そついうわけなんだ。大丈夫。気にすんな」

「でも、身体は大丈夫かもですけど、早瀬君自身は……」

俺を庇って源さんたちは重傷を負った。俺があの場合にしなければ、
乃木さんだけだったなら、上手く逃げらたかもしれないのに。

「だから大丈夫だって。俺は闘える。何の問題ない」

身体の疲れはない。エリクサーの力が流れ込んでるんだ。

福地さんは先に行く。行き先はわかつてる。今朝使ったミーティ
ングルームだ。

「そついうことだからよ。ありがとうな。お前には感謝してる」

桂木に背を向け、福地さんの後についていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379z/>

職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

2011年12月26日13時51分発行